



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学，そして科学コミュニケーションはどこへいくのか
Author(s)	内村，直之
Citation	科学技術コミュニケーション， 37， 79-81
Issue Date	2025-08
DOI	https://doi.org/10.14943/114627
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95905
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_37_10_uchimura.pdf



科学，そして科学コミュニケーションはどこへいくのか

内村 直之¹

Where Are Science and Science Communication Headed?

UCHIMURA Naoyuki¹

キーワード：CoSTEP，科学技術コミュニケーション，科学コミュニケーションの課題，科学ライティング，書くことと考えること

Keywords: CoSTEP, science and technology communication, challenges in science communication, science writing, writing as thinking

2014年(10期)から2021年選科BまでCoSTEPのお手伝いをした(図1)。最後の方は、コロナ禍のために北海道の地を踏んでいないので印象が薄い。やはり、人と人とが生に出会うことがコミュニケーションには必須のことといまさらながら感じる。CoSTEP20周年を機に、科学と科学コミュニケーションについて、思うことを記す。今、それらには未曾有の危機が訪れているように思う。

CoSTEP「科学技術コミュニケーション養成ユニット」が北海道大学に発足したのは2005年7月1日である。1995年に科学技術基本法が成立し、科学技術創造立国が提唱された。2000年には「第2期科学技術基本計画」が策定され、「研究開発投資の重点化・効率化」が決定され、01年には総合科学技術会議(現在は総合科学技術イノベーション会議=CSTI)が発足した。CoSTEPはこの文脈の中で生まれた。同年、科学技術庁(当時)で科学技術と普通の人々との橋渡し役を務める「インタープリター」の養成の必要性が打ち出された。それが双方向性を持つ「コミュニケーション」に拡大され、2005年文科省の科学振興調整費で早稲田大、東京大のプロジェクトと並んで、CoSTEPが発足した。それが終わっても北大は独自にその科学コミュニケーション教育システムを維持し続けた。

その役割は、表現技法(文章やプレゼンテーション、グラフィックデザイン、映像)、対話スキル(インタビューやファシリテーション、カフェ)、論理的思考法など、科学技術コミュニケーションとしての活動に必要な知識と方法を学び、従来から「難解」とされた科学と技術の内容を噛み砕いて普通の人々の伝える(コミュニケーションする)ことであった。私も文章作成(科学ライティングというがその内実は科学に集中するだけではない)という分野で、いかに筋の通ったわかりやすい文章で伝えたいことを表現するかという方法を教えた。受講者の興味の中心が、大学などの専門分野で出てくる成果をどのように伝えるか、つまりよい「プレスリリース」を作るにはどうすべきかが内容の幹となったことは否めない。

私は「書くことは考えることである。考えることは書くことである」というスローガンを提唱、単に噛み砕くだけではない、さらに書くことによって自らの理解と思考を深化させる方向性をライ

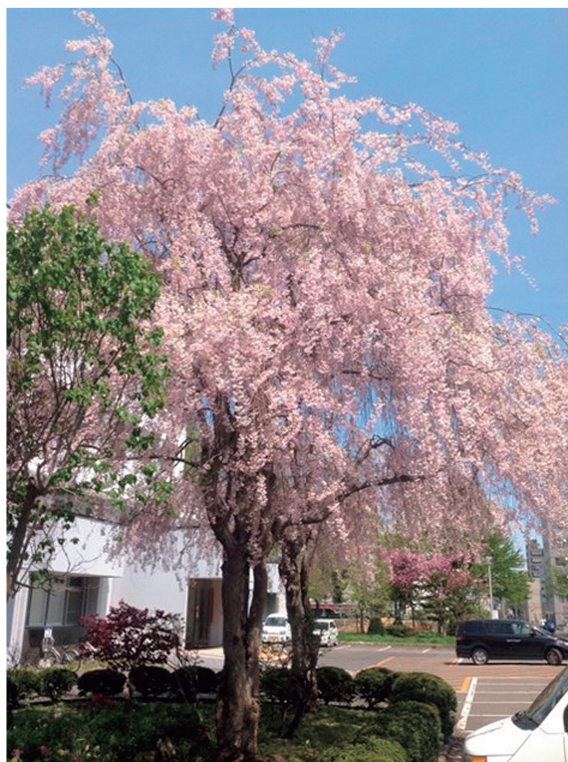


図1 CoSTEP 初参加の2014年に見た北大構内のサクラ

ティングという分野で示してみたのだが、果たしてうまくいったか……

同様のあがきは、CoSTEP に力を注いでいた人々にはあった。たとえば大型書店の片隅で開かれるサイエンスカフェ、あるテーマに沿って展開された模擬裁判劇などにそれが見えていた。その一方で、とっつきにくい科学・技術の内容をなるべくひっかかることなく受容してもらおうという「ソフト化」の方向もあったと思う。

科学というものは、もともとハードな存在である。各々の分野に特有の内容、思考方法、表現技術が存在し、そのハードルを超えないとプロとアマが「分かり合えた」という域にはなかなか届かない。「当たらずとも遠からず」というレベルの表現は、科学を解説するためにはまだまだ改良が必要ではずだ。そこでは「書いた文章」というメディアが大きな可能性を持つと思っている私は、CoSTEP ではいろいろな方向から試せたと思っている。



「科学技術と普通の人々との橋渡し」はうまくいっているだろうか？私は相当程度に悲観的である。

IT という技術がもたらした社会の変化が生んだものは、便利さよりもむしろこれまで人が持っていたコミュニケーションノウハウの大規模な破壊ではないかとさえ感じる。1970年代、パソコン通信によるコミュニケーション（米国西海岸から広まった文化）が開いたフラットな情報社会はインターネットとSNSによって蛸壺化し、エコーチェンバー化した。論理的思考よりも情動的反応が中心となり、反知性的、あるいは反科学的となってきた。

情報の入れ物でしかないはずのメディアの力は大きく、それを使う人々の思考回路さえ変化させてしまう。それは15世紀に発明された活版印刷という技術によって生まれた印刷書籍が宗教と文化の状況を変えてしまうという歴史に証明されているが、今、20世紀終わりに生まれたインターネットという情報メディアは同様、あるいはそれ以上の変化を起こしている。AI（人工知能）の発展も同様の問題を生むだろう。21世紀を4分の1世紀だけ過ぎた今の社会、政治、国際状況を見るとそういう現在と未来を感じざるを得ない。

これまでの「科学技術と普通の人々との橋渡し」は、多くの場合、科学側と普通の人の両方にメリットがあった。もちろん、70年代の「公害問題」、2011年にカストロフィックな結末を示した「原子力問題」、今も進行中の「地球温暖化問題」などもあり、負の側面を克服するための「橋渡し」はどれだけ進み、効果を見せているだろうか？このような「橋渡し」には単なるコミュニケーションだけではなく、批評、批判の力が必要となる。それはジャーナリズムの役目であったはずだが、その力もITによる情報の混沌の中で削がれるばかりである。

これからの科学と科学コミュニケーションはどのような道をたどるだろうか、あるいはどのよう

な道をたどるべきだろうか。私も考える。これを読むあなたも考えてほしい。

注

平成の科学状況については 私の書いた

- ・「平成の「科学研究」と「科学技術政策」のねじれた関係」

<https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00464/>

- ・日本物理学会誌 特別企画「平成の飛跡」の「物理学, 物理学者と社会」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/butsuri/74/5/74_300/_article/-char/ja/

の2本の記事を参照してください。